

昭和54年度  
(1979)  
第19回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌静修

【 専門委員長 寸評 】

最初に、男子団体3連勝の藻岩高校に敬意を表したい。萩原・山室などの1年生の時から実力をもっていた選手を軸に、切れ目のない選手陣を育てた緒方先生の努力、またそれを支えた先輩、それに応えた選手が一体となって得た成果であろう。全国のベスト8進出も含めておめでとうといたい。

今大会は男女とも札幌3校の実力接近、それに旭川北がどうからむかが興味的であった。男子の清田-旭川北は、清田の管野が好調で、ダブルスに機先を制し、清田のものとなる。藻岩-清田は藻岩のダブルスの堅実味、No.1萩原の正確さで藻岩。決勝では東のエース熊谷に期待が持たれたが、生彩なく、あっけなく藻岩の3連覇になった。

女子は清田-静修が圧巻であった。一進一退のゲームであったが、当番校の面目にかけた静修のねばりがちとなる。決勝は山室を病気で欠いた藻岩の分が悪く、4年ぶりの静修の優勝となる。

個人戦では、団体戦の激戦を反映してか、予想外の結果が続出した。

男子ダブルスでは団体戦好調の田宮・北川(札幌藻岩)が旭川北の佐々木・星に接戦の結果破れる。佐々木・星組はその後、けいれんで棄権、惜しいことであった。シングルスでは優勝校藻岩が総崩れ、清田勢の善戦が目立った。とくに山本は個人戦になって開眼したような働きを示した。優勝した山中(北星男)は緩急を心得たプレーでよく勝利を得た。

女子は小西(札幌藻岩)対佐藤(札幌静修)が興味をもたれたが、佐藤に安定性を欠き、小西のものとなる。

総体的には、昨年とくらべると男子の層が厚くなり、藻岩に迫るようになってきた。プレーもそれだけ変化をもつようになり、楽しみをまして来た。ただ、3年生が強く、2年生としては北川(札幌藻岩)のみであるので、これに続く選手の養成がのぞまれる。

女子は昨年的大河原(札幌藻岩)のようなパワーのある選手がぬけたのでややこじんまりした感がある。とくに藻岩、清田、静修と力の互角の学校が競いあったため、勝負が先になってしまった感があった。

終りに今大会は会場難で2カ所、それも札幌北部と中央部にかけはなれたため、運営輸送で苦勞したが、その困難な中で万全の配慮をしていただいた当番校、札幌静修高校の諸先生、生徒諸君のご尽力に感謝する次第である。

#### 【全国大会】

今年は北海道高校庭球界にとっては輝ける年であった。男子のベスト8進出、女子の3回戦は今までにない成果であり、大いに喜ぶたい。

これも冬のハンディを克服すべく、さまざまな工夫と練習を試みた結果であり、両校監督、選手に敬意を表したい。

また女子個人の単・複3回戦進出も立派であった。いずれも強豪選手。シングルス小西（札幌藻岩）の相手はダブルス優勝の森口（兵庫・武庫川）に、馬淵・東組（札幌静修）は岡山山陽高校の宗高・河本組（準優勝）に当たり、それぞれ第1セットは気後れの感があったが、もう一つ試合経験があれば壁はつきぬけられたであろう。

（ 専門委員長 亀山 省吾 ）

## 優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

全道大会2年連続優勝を成し遂げ、“全国大会で勝つこと”を目標に1年間、毎日練習を積んできた我々にとって、この全道大会はどうしても負けられない試合でした。しかし、こうした精神的なプレッシャーが団体戦前日の個人戦敗退となって表れてしまいました。我々は試合に負けた悔しさと自分に対する情けなさに胸がつぶれる思いでした。そして「試合は勝つことが第一だ。負ければ何も残らない」という顧問の先生の言葉を身にしみて感じました。しかし、この敗戦が、3連覇に向かって部員全員の肝を一つにしました。何がなんでも勝つんだ！私はこの時ほどみんなの気持ちの高まりを感じたことはありませんでした。

いよいよ団体戦。我々は今まで練習で培ってきたもの全てを試合にぶつけました。もちろん苦しい試合でした。しかし、ついに3連覇を達成することができました。我々3年生にとって3年間でいちばんうれしい優勝でした。

こうして顧問の先生の御指導、諸先輩の御協力、そして部員全員の力によって、全道大会3連覇という伝統を築きあげることができました。

また、我々の後輩がこの連勝記録を伸ばし、藻岩高校庭球部の伝統を守り続けてくれることを心から期待しています。

（ 札幌藻岩高校 主将 萩原 明人 ）

## 優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

過去9回の全道大会団体優勝・・・多くの先輩が築き上げて下さったこの輝かしい歴

史。今年私達が10度目の優勝を遂げようと3年生はもちろん、部員全員が一丸となって、最大の目標である全道制覇めざして毎日の練習に励んできました。

知ってのとおり我が校にはコートがないため土・日曜は太平やポプラコートに行くなど練習時間も短時間に制限され決して恵まれているとは言えなかったと思います。でも春季・札幌地区大会の優勝がまぐれだと言われないように、今までの練習が無にならないように、また忙しい中でも私たちのために一生懸命指導して下さいました顧問の横山先生のためにもあと残された全道大会を勝ち抜かなければなりません。

「今の自分に満足してはいけない。相手以上に成長しなければ勝つことはできない」こんなプレーではとても優勝なんて・・・という不安のまま、遂に優勝！！これこそ私たちが最終的に求めていたものなのに、いざ到達してしまうと信じられず、実感が湧きませんでした。これからの私たちに残されたことは、自分の持っている技術を後輩に受け継ぎ今後の静修の活躍に期待することだけだと思います。

( 札幌静修高校 主将 馬淵 真須美 )

全国高校総体 (第69回全国高等学校庭球選手権大会) 滋賀

8月3日～9日 金亀公園庭球場 滋賀県立総合運動場庭球場

男子 個人戦シングルス 優勝 二本松 一 (柳川商業)